１．ボランティアセンター「学生コーディネーター」

実施目的	(1) 学生がボランティアセンターの運営や事業に参画することを通して、学生のニーズを反映させることで学内外における社会連携教育課事業の一層の活性化を図ること。 (2) 継続的な取り組みにすることで、学生に対し、ボランティア活動やボランティアコーディネーションにおける実践的かつ深い学びを提供すること。	
募集期間	2023年６月12日（月）～７月３日（月）12：00	
活動期間	2023年８月～2024年３月31日（日）	
定　　員	池袋キャンパス：２名程度/新座キャンパス：３名程度	
選　　考	活動に関する双方のイメージのズレがないことを確認するため、エントリーシートをもとに「オンライン面接」を実施し、最終的な採用者を決定した。	
所属学生	第一期 （2022年度～）	・ 児島　渚佐　（経済学部 会計ファイナンス学科　４年） ・ 佐藤　愛夢　（社会学部 現代文化学科　４年） ・ 北村　香乃　（経済学部 経済学科　３年） ・ 松戸　徳寿　（現代心理学部 心理学科　２年）
	第二期 （2023年度～）	・ 高野　穂乃香（法学部 政治学科　３年） ・ 古村　一葉　（現代心理学部 映像身体学科　３年） ・ 坂田　治哉　（文学部 史学科　２年） ・ 池田　明悦　（法学部 法学科　１年） ・ 山崎　藍　（法学部 国際ビジネス法学科　１年） ・ 鈴木　紅后　（コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科　１年）

(1) 学生コーディネーターMISSONの設定

ボランティアセンターのMISSIONの達成に向けた、学生コーディネーターの活動指針が『学生コーディネーターMISSION2023』である。

立教大学ボランティアセンター ミッション・ステートメント
立教大学ボランティアセンターは『共に生きる』を礎に、学生が他者との関わりや社会的な課題に取り組むことを通して、人間としての成長とよりよき社会の実現を目指す意志の育成を図ります。

↑

『学生コーディネーターMISSION2023』
１．ボランティアの魅力の再発見・発信 「ボランティア」という言葉の硬さ・分かりにくさ・特別感などが学生の中にあり、活動に参加するうえでのハードルが高くなっているため、一部の価値観に偏ることがないように、学生コーディネーター自身が「ボランティア」に対する考えを深めたり、その魅力を再発見したりしながら、それらを多くの学生に伝えていく。 ２．ボランティアセンターの活動の見える化 現状としてボランティアセンターの中身（取組みや人、情報など）が見えにくい状況にあり、学生がアクセスしにくいということが大きな課題となっているため、ボランティアセンターの活動やそこに関わる人などを広く知ってもらうことで、安心してボランティアセンターに来室できるようにしていく。 ３．人と人とをつなげるきっかけをつくる ボランティア活動への一歩を踏み出しやすいような環境づくりに取り組むことで、学生が学内外に限らずコミュニティを広げ、多様な人とつながっていけるようなきっかけをつくっていく。

(2) 学生コーディネーターの主な活動

A) ボランティアセンター主催の取り組みへの参画

センター主催の普及・啓発のための取り組みの企画・運営に携わる。

B) 上記以外のボランティア活動の啓発にかかわる学生コーディネーター企画の立案・実施

同じ学生の立場から、ボランティアを身近に感じ、参加につながるきっかけとなるような取り組みを企画・提案・実施する。

C) ボランティア活動に関心のある学生やボランティア活動に取り組んでいる学生の支援

ボランティア活動希望の相談者へのアドバイスや学内のボランティア活動団体のネットワーク運営のサポートなどを行う。

D) ボランティアコーディネーション力の向上

上記に取り組む上で、多様なニーズに応えられるようにスキルアップに取り組む。

E) 定期的なミーティング（授業実施期間は、週１回）

企画の構想をまとめるための議論や合意形成、実施に向けた準備や情報共有を行い、より良い実践につなげる。

(3) キックオフミーティング

実施日時	2023年４月20日（木）18：00-19：00
場　　所	池袋キャンパス ボランティアセンター
実施目的	(1) メンバー一人ひとりの想いを共有することを通して、チームとしての連帯感・所属意識を高めること (2) 今後の活動に向けたアイディアを共有し、それを具体的な実施計画へと落とし込むことで、全メンバーが 2023 年度の方針を理解すること
参 加 者	学生コーディネーター５名、ボランティアコーディネーター２名
主な内容	(1) 前年度MISSIONの振り返りと今年度MISSIONの設定 (2) 前年度スケジュールの振り返りと今年度計画の作成

(4) 研修合宿（オリエンテーション）

実施期間	2023年７月31日（日）～８月２日（火）
場　　所	新座キャンパス 太刀川記念館交流会館、新座キャンパスボランティアセンター、新座市社会福祉協議会、NPO法人新座子育てネットワーク（ドロップイン203）
実施目的	(1) ボランティアセンターのミッションや取り組みについての理解を深めること。 (2) ボランティア活動やボランティアコーディネーションについての基本的な考え方を理解したうえで、学生コーディネーターとして取り組みたいこと・取り組むべきことを具体的にイメージし、メンバー内で共有すること。 (3) チームとしての連帯感を高めること。
参 加 者	学生コーディネーター：10名／ボランティアコーディネーター：２名

今年度新たに加わった第二期学生コーディネーターが合流し、今後の活動に向けた研修合宿を実施した。具体的な活動内容を一期生から二期生に共有した他、ボランティア相談対応のロールプレイや新座市内でのフィールドワークを交えながら、ボランティアやボランティアコーディネーションに関する学びを深めていった。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

(5) 任命式

実施日時	2023年８月２日（火）13:00-14:00
場　　所	立教学院聖パウロ礼拝堂（チャペル）
内　　容	「礼　拝」 「奨　励」 　中川　英樹（ボランティアセンター長／大学チャプレン） 「任命式授与」 　中川　英樹（ボランティアセンター長／大学チャプレン）
参 加 者	学生コーディネーター：９名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：５名

学生コーディネーター研修合宿の最終日に、立教学院聖パウロ礼拝堂（チャペル）にて、任命式を実施。ボランティアセンター長の中川英樹チャプレンから、メンバー一人ひとりに任命証が手渡された。

(6) 学生コーディネーター企画
ボラカフェ「子どものサポートをするボランティア活動。実際どんな活動なんだろう？」

実施日時	①2023年６月29日（木）12：30-13：20、②７月５日(水) 12：30-13：20
場　　所	①新座キャンパス ７号館２階会議室　②池袋キャンパス ５号館１階第一会議室
実施目的	(1) 実際にボランティア活動に参加した人との交流を通して、ボランティア活動を身近に感じてもらい、参加へのハードルを下げること。 (2) 学習支援のボランティア参加を考えている学生に対し、きっかけとなる場を提供することで、その学生がボランティア活動を始めたり、受入団体とつながったりすることができるようになること。
MISSION との対応	１．ボランティアの魅力の再発見・発信 ３．人と人とをつなげるきっかけをつくる
ゲ ス ト	①土屋　匠宇三さん（一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク代表理事） 　横田　藍さん（一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワークコーディネーター） ②横田　藍さん（一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワークコーディネーター） 　溝口　遼さん（一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク支援員）
参 加 者	①一般参加：４名／学生コーディネーター：２名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：２名 ②一般参加：３名／学生コーディネーター：５名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：３名

新座キャンパスで開催した回には、代表理事の土屋匠宇三さんとボランティア担当の横田さんに、池袋キャンパスの回には、同じく横田さんと支援員の溝口さんにゲストとしてお越しいただいた。会場では椅子を丸く並べて座り、「学習支援ボランティアの現場の様子」や「それぞれがその場にどのようにして関わることになったのか（ご自身の経験など）」をお聞きした。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

(7) 学生コーディネーター企画
ボラカフェ「あの人の声を届けたい～戦争経験者の想いを今につなぐ立教生～」

実施日時	2023年７月６日（木）17：10-18：10
場　　所	新座キャンパス ７号館２階ミーティングルーム

実施目的	(1) 戦争体験の伝承に取り組む立教生の活動を知ったり、戦争や平和に関するそれぞれの考えを参加者同士で共有し合ったりすることで、戦争経験者の声と若い世代をつなぐこと。 (2) 団体を立ち上げ、ボランティア活動をしている人との交流を通して、ボランティア活動を身近に感じてもらい、参加へのハードルを下げ、後押しすること。
ゲ ス ト	小林　友香さん（コミュニティ福祉学部 福祉学科 1年／学生団体 peace&voice 代表）
参 加 者	一般参加：２名／学生コーディネーター：２名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：２名

今回は、“戦争体験の伝承”をテーマに開催した。高校２年生の時に学生団体「peace ＆ voice」を設立し、現在も戦争経験者やその記憶を語り継ぐ活動を行っている小林友香さん（コミュニティ福祉学部 福祉学科 １年）をゲストにお招きし、小林さんが戦争経験者の方からお聴きして記録しているお話や、これまでどのような想いで活動してきたのかなどを伺った。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

(8) 「第１回 東京都内大学ボランティアセンター学生スタッフ交流会」への参加

主　　催	成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフSeivior
実施日時	2023年８月31日（木）13：00-16：00
場　　所	成蹊大学 ６号館301
参 加 者	学生コーディネーター：４名／ボランティアコーディネーター：１名

交流会には、主催の成蹊大学ボランティア支援センターの学生スタッフに加え、青山学院大学シビックエンゲージメントセンターの学生スタッフ、中央大学ボランティアセンターの学生スタッフ、そして立教大学ボランティアセンターの学生コーディネーターが参加した。

ボラセン見学から始まり、アイスブレイクを経て、「ボランティアセンター学生スタッフの認知度の向上」「継続的にボランティア活動に参加してもらうための工夫」についての意見交換を行った。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

(9) 学生コーディネーター企画
ボラカフェ「私がボランティアを始めたきっかけ」

実施日時	第１回：2023年11月28日（火）、第２回：11月30日（木）、第３回：12月５日（火） ※時間はいずれも、12:35-13:15
場　　所	新座キャンパス ７号館２階ミーティングルーム
実施目的	(1) 身近な立教生のボランティア経験を伝えることで、参加者が抱えているボランティア活動への不安や課題（活動の探し方が・参加方法がわからない等）を解決するヒントを提供すること。 (2) 複数のボランティア活動経験者の声を通して、それぞれが感じる実態やその違いなどを伝えることで、ボランティア活動の価値・魅力を感じてもらい、活動参加へのハードルを下げること。
MISSION との対応	１．ボランティアの魅力の再発見・発信 ２．ボランティアセンターの活動の見える化

内　　容	学生コーディネーターのボランティア経験（始めたきっかけ、始め方等の話）から、これからボランティア活動を始める学生のためのヒントを共有する。	
話 し 手	第１回	鈴木　紅后（コミュニティ政策学科 １年）
	第２回	松戸　徳寿（心理学科 ２年）
	第３回	古村　一葉（映像身体学科 ３年）
参 加 者	第１回	学生コーディネーター：２名／ボランティアコーディネーター：１名
	第２回	学生コーディネーター：２名／ボランティアコーディネーター：１名
	第３回	一般参加：１名／学生コーディネーター：３名／ボラセンスタッフ：１名

ボランティア活動経験のある立教生から「ボランティアの始め方」や「参加の一歩を踏み出すためのヒント」を聞くことで、これから活動に参加する学生の参考になればと考え、企画した。今回は、学生コーディネーターが話し手・聞き手に分かれてお互いの経験を掘り下げていくことで、参加に向けたヒントになるような動きなどを整理しながら共有した。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

(10) 学生コーディネーター企画「学生コーディネーター相談会」

実施日時	①2024年１月９日（火）昼休み-３限、②１月10日（水）昼休み-３限、 ③１月11日（木）昼休み-３限
場　　所	①②池袋キャンパス ボランティアセンター、③新座キャンパス ボランティアセンター
実施目的	(1) ボランティアに興味をもっている学生に対し、同じ学生の立場からボランティアコーディネーションを実践することで、求めているボランティア活動のイメージを具体的にしたり、活動参加への不安を軽減したりすること。 (2) 学生による学生のサポートによって、学生主導のボランティア活動を促進すること。 (3) 学生コーディネーター同士が集う機会を定期的に設けることで、互いの親睦を深めること。
MISSION との対応	１．ボランティアの魅力の再発見・発信 ３．人と人とをつなげるきっかけをつくる
参 加 者	①学生コーディネーター：３名／ボランティアコーディネーター：１名 ②学生コーディネーター：４名／ボランティアコーディネーター：１名 ③学生コーディネーター：１名／ボランティアコーディネーター：１名

今回は試験的な実施であったため広報をしておらず、ボランティア相談に訪れた学生は残念ながらいなかった。しかし、学生コーディネーター同士の交流機会になり、現在進めている企画などの作業を共に進めることもできた。今後はしっかりと広報したうえで、ボランティア相談が増える時期に実施したい。

(11) 学生コーディネーター企画「学生コーディネーター交流会」

実施日時	2024年１月17日（水）17：30-19：00
場　　所	池袋キャンパス ５号館 第一会議室
実施目的	(1) 池袋学生コーディネーターと新座学生コーディネーターの交流を図ること。 (2) 今後学生コーディネーターとして企画を考えていく上で必要な関係性を築くこと。
参 加 者	学生コーディネーター：６名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：４名

二期生が中心となって準備を行い、「ボッチャ」や「NASAゲーム」「ビンゴ」などを通して、交流を深めた。これまで企画を立案したことのなかった二期生にとっては初めての企画・運営の経験となったが、一期生が企画をサポートしながら進めたことで、無事に実現まで至った。

（12）「関東地区ボランティアセンター 学生スタッフサミット」への参加

主　　催	青山学院大学シビックエンゲージメントセンター 学生スタッフ
実施日時	2024年２月５日（月）13：00-16：00
場　　所	青山学院大学 相模原キャンパス D棟113教室
参 加 者	学生コーディネーター：３名／ボランティアコーディネーター：１名

交流会には、青山学院大学シビックエンゲージメントセンターの学生スタッフに加え、成蹊大学ボランティア支援センターの学生スタッフ、そして立教大学ボランティアセンターの学生コーディネーターが参加した。

キャンパス及びシビックエンゲージメントセンター内の見学から始まり、「学生スタッフの活動に興味をもってもらうためには」「ボランティアの広報について学生スタッフにできることは」「ボランティアを始めるきっかけを作るには」といった３つのテーマについてディスカッションを行った。

（13）ふりかえり合宿

実施期間	2024年２月28日（水）～29日（木）
場　　所	新座キャンパス 太刀川記念交流会館
実施目的	(1) 学生コーディネーターMISSIONに対して、2023年度における学生コーディネーターの取り組みや各人の実践を振り返ること。 (2) 振り返りの成果をもとに、活動報告会の発表準備や次年度計画の作成を進めること。 (3) チームとしての連帯感を高めること。
主な内容	(1) チェックイン (2) 2023年度の活動の振り返り (3) 活動報告会に向けた準備（方向性の確認、役割分担、スライド作成など） (4) 学生コーディネーター企画（動画制作）の実施に向けた作業 (5) チェックアウト
参 加 者	学生コーディネーター：４名／ボランティアコーディネーター：２名

１年間の振り返りを行い、次年度の活動につなげるため、１泊２日の合宿を行った。2023年度における学生コーディネーターの取り組み（出来事）を時系列に並べたうえで、それらに対する「良かった点」「改善点」「その時の感情」を書き出し、全体で共有していった。

ここで共有したことをもとに、活動報告会に向けた準備を進めた他、学生コーディネーター企画として進めているボラセンの紹介動画の撮影なども行った。

学生スタッフ交流会@成蹊大学

学生スタッフサミット@青山学院大学

ふりかえり合宿

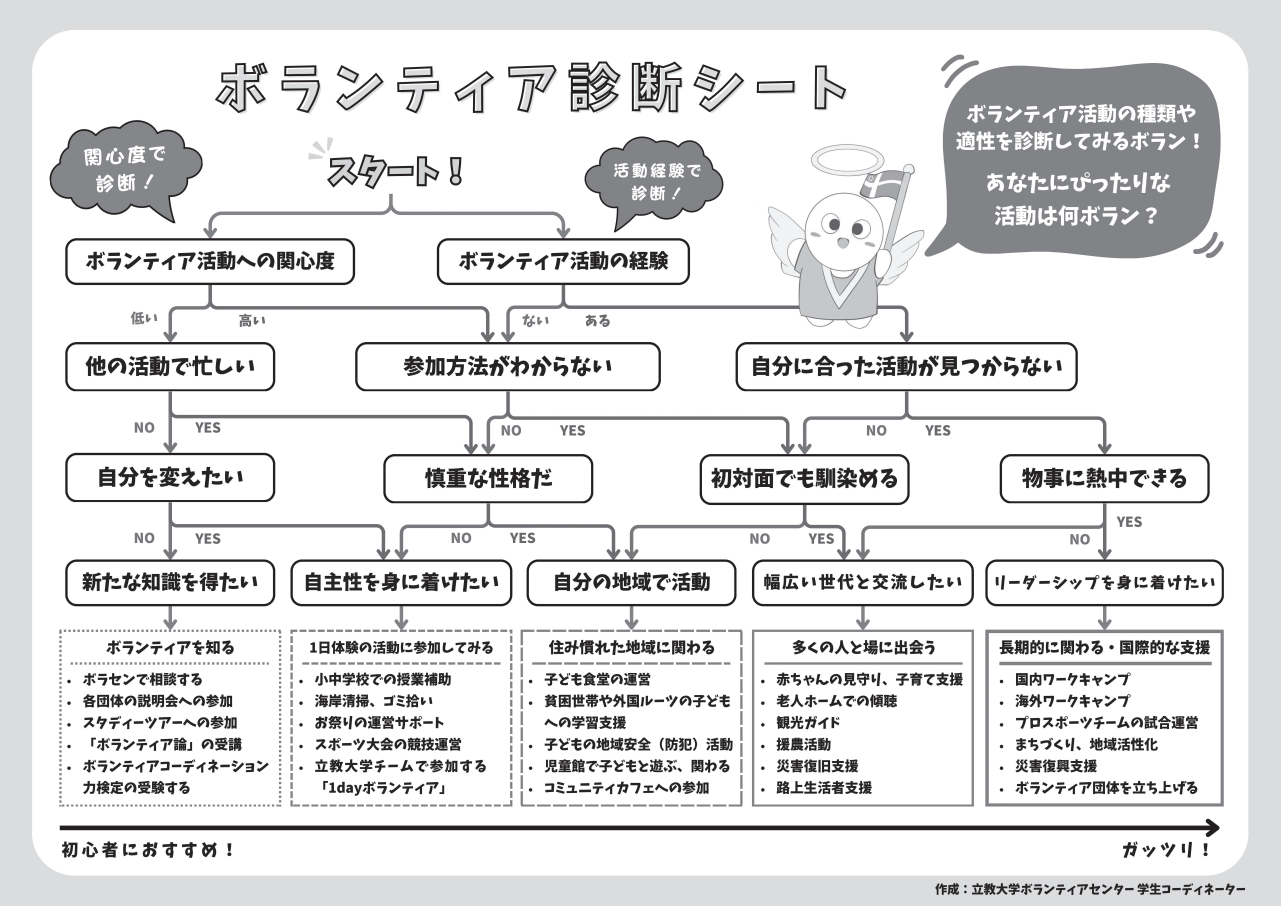
【現在進行中の学生コーディネーター企画】

（14）学生コーディネーターオリジナルキャラクター」の制作

実施目的	(1) イラストを通して、ボランティアセンターや学生コーディネーターの取り組みをより多くの学生に伝えること。 (2) 広報時の文章量を減らし、身近でわかりやすい情報発信にすること。
主な内容	学生コーディネーターオリジナルキャラクターの制作

（15）「ボランティア診断シート」の作成・活用

実施目的	(1) ボランティア活動希望者が診断シートを活用し、ボランティアの活動分野や適正を知ることで、活動参加のハードルを下げること。 (2) ボランティア相談の場面で、相談者の関心を引き出す手段の一つとして活用すること。
MISSIONとの対応	1．ボランティアの魅力の再発見・発信
主な内容	これからボランティア活動を始めようと考えている人が、「関心度」「活動経験」のいずれかから自分に合った活動内容を探せるようなフローチャートの作成
配布場所	各キャンパスのボランティアセンター



（16）ボランティアセンター紹介動画の制作

実施目的	(1) 動画を通した情報発信によって、ボランティア活動に関心のある立教生の「参加の一歩」を促進させること。 (2) 「ボランティアセンター」「学生コーディネーター」の認知度を高めること。
MISSIONとの対応	1．ボランティアの魅力の再発見・発信 2．ボランティアセンターの活動の見える化
主な内容	以下の４動画を制作し、ボランティアセンター公式YouTubeチャンネルで配信する。 (1) ボランティアセンターまでのアクセス動画（池袋キャンパス編） (2) ボランティアセンターまでのアクセス動画（新座キャンパス編） (3) ボランティアセンター紹介動画 (4) 学生コーディネーター紹介動画

2．バリアフリープロジェクト

実施目的	1．学生が、社会の中で人々を分断する「バリア」とは何かを考えながら、自由な発想と行動力を生かして、その解消を目指すこと。 2．新座キャンパス周辺地域に密着し、多様な人が参加できる企画とそれを楽しめる環境を創ること。 3．立教大学における新たな「バリアフリー」の取り組みのカタチを探ること。
募集期間	2023年６月21日（水）～７月19日（水）12：00
活動期間	2023年８月３日（木）～プロジェクトの終了まで ※2023年度中
定　　員	各キャンパス５名 →８名（池袋５名、新座３名）の応募があり、そのまま全員が参加となった。

■ 趣旨・背景

本学の新座キャンパスオープン時に、キャンパス周辺地域に受け入れてもらうため、福祉・心理・観光（学部）というヒューマンサービスの観点から地域密着型の活動を検討し、「バリアフリー映画上映会」を企画。大学として責任をもちながらも学生の自主性・主体性を大事にするため、「ボラセン主催・学生実行委員会実施」という実施体制を整備した。しかし、コロナ禍となった2020年度以降は実施形式をオンラインに変更。2021年度からは学生実行委員会を解体し、ボランティアセンターが運営を担う体制に変更していた。

2022年度に、これまでの実施内容や実施方法を見直した上で、発足時に期待されていた「学生による主体的な取り組み」という価値をより一層大きくするために、実施体制を「主催：学生実行委員会／協力：ボランティアセンター」とし、これまで前提となっていた「映画上映」という手段に限らず、多様な手段を選択することによってバリアの解消を目指せるような取り組み「バリアフリープロジェクト」として、再スタートさせ、2023年度は同様に「バリアフリープロジェクト」のメンバーを募集した。昨年度実施時の運営上の課題などもあり、今年度はキャンパスごとにチームを結成することとし、募集人数は、各キャンパス５名ずつとした。

1）「キックオフミーティング①（全体）」の実施

実施日時	2023年８月３日（木）10：00-12：30
場　　所	新座キャンパス N422教室
実施目的	(1) 本プロジェクトの概要について理解を深めるとともに、プロジェクトの体制や進め方などのスタートラインを確認すること (2) メンバー一人ひとりの想いや考えを共有することを通して、チームとしての連帯感・所属意識を高めること（チームビルディング）。 (3) バリアについて視野を広げ、解消したい「バリア」について具体的に考えることにより、プロジェクト全体のゴール設定や今後の実施体制の整備につなげること
ゲ ス ト	・ 結城　俊哉 先生 （コミュニティ福祉学部 教授／ボランティアセンター 副センター長） ・ 宇津木　祐子 さん （文学部 文学科日本文学専修３年／2022年度 同プロジェクト参加メンバー）
参 加 者	学生実行委員会：６名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：３名 ※欠席の学生２名については、8/8（火）・8/22（火）にそれぞれフォローアップを実施した。

キックオフミーティングでは、2022年度のプロジェクト参加学生に協力していただき、プロジェクトメンバーとして当時直面した課題や活動を進める上でのアドバイス、コミュニケーションの大切さなど貴重な経験をお話しいただいた。自身のチームで取り組んだこと、そこにたどり着くまでの経緯、活動を通じて学んだこと、プロジェクト全体のスケジュール感等、実際にメンバーとして活動した学生に具体的な話を聞くことで、活動へのイメージを膨らませた。

また、結城先生より、ご専門のノーマライゼーションについてお話を伺い、社会的障壁（バリア）への理解を深めた。しょうがい者福祉の歩みや様々なマイノリティ―を例に、「誰もが排除されない社会の創造」に向けて必要なことについてレクチャーしていただいた後、それらについてディスカッションを行い、それぞれが日常生活で感じる“バリア”について、考えや価値観を共有した。

最後に、キャンパスごとのチームに分かれてプロジェクトを進めていくための今後のスケジュール等について確認した。

2）「キックオフミーティング②（チーム別）」の実施

実施日時	①2023年８月30日（水）10：00-12：00、②９月19日（火）13：00-15：00
場　　所	①オンライン（zoomミーティング）、②池袋キャンパス ５号館 第一・第二会議室
実施目的	(1) 本プロジェクトの体制や進め方を確認し、学生の主体的な取組みとして自走できるようエンパワメントすること。 (2) メンバー一人ひとりの想いや考えを共有することを通して、チームとしての連帯感・所属意識を高めること（チームビルディング）。 (3) プロジェクト全体のゴール設定や実施体制（役割分担）をすること。
内　　容	(1) 活動に関する情報共有（MTGのもち方、記録データの管理、実施計画の立て方など） (2) テーマについてのアイディア出し
参 加 者	①新座チームのメンバー：２名／ボランティアコーディネーター：１名 ②池袋チームのメンバー：４名／ボランティアコーディネーター：１名

チームごとに分かれ、２回目のミーティングを実施した。夏季休業中に個人で考えたことを共有し、チームで取り組むテーマや今後の展望などについて話し合った。

3）定期ミーティングの実施

昨年度は、チームによっては、キャンパスをまたいだメンバー構成となり、ミーティングの持ち方も特に対面となると難しい部分があったが、今年度はキャンパスごとのチームで活動を行うことにしたため、打合せの日程調整が容易になった。各キャンパスでコーディネーターを交えて、より時間をかけてサポートができるようになったことから、昨年度のように２週間に一度の全体ミーティングは実施しないこととした。チームごとにボランティアセンターに集まる、あるいはオンラインでメンバーが参加し、キックオフミーティング後の10月から翌年１月まで週に１回のペースでミーティングを実施した。各チームの進捗については、センター内の課会で報告し、必要に応じてそれぞれのチームに対するフィードバック等もこの場で共有した。

4）中間報告会の実施

実施日時	2023年11月15日（水）13：30-14：30
場　　所	オンライン（zoomミーティング）
実施目的	(1) 各チームの進捗状況を報告することで、必要なことを確認すること。 (2) キャンパス同士で意見交換の場を設けることで、新しい視点を得ること。
参 加 者	池袋チームメンバー：３名／新座チームメンバー：２名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：６名

週１回のミーティングを通してそれぞれのチームの方向性がある程度まとまったことから、中間報告会を実施した。各チームが10分程度で現状を報告し、それに対して他チームの学生やボランティアセンタースタッフからのフィードバックを行った。

5）各チームの取り組み

①　池袋チーム

所属：経済学科２年、経済政策学科２年、現代文化学科１年、現代文化学科３年、現代文化学科４年

同チームは、「スチューデントアパシー」という問題に関心をもち、忙しさに追われることにより感じられるバリアやその解決に向けて議論を重ねてきた。チームメンバーがこれまでに感じたバリアを共有する中で、「スチューデントアパシー」と呼ばれる学生特有の障害を知り、学生でありながら本業であるはずの学業への意欲のなさ、無気力な状態に関する最近の研究がなく、学生である自分たちが調べることで新たな視点につながるのではと考え、このテーマに着目した。

■「原　信夫先生（新座学生相談所）へのヒアリング」の実施

実施日時	2023年10月30日（月）16：00-17：00
場　　所	オンライン（zoomミーティング）
実施目的	(1)　ヒアリングを通して「スチューデントアパシー」について理解を深めること。 (2)　具体的な疑問の解消とともに、自分たちが課題を感じている点についてお話を伺い状況を認識することで、今後の活動指針とすること。
ヒアリング内容	・　スチューデントアパシーと学歴尊重主義、親の支配との関係、社会的要因について ・　日本において、受験がゴール、授業が一方向な形式であることと、スチューデントアパシーの関係について ・　アイデンティティとスチューデントアパシーの関係 ・　スチューデントアパシーの行動障害について ・　今の大学生の特徴、学生が欲している繋がりはどんなことか ・　スチューデントアパシーだと判断する基準について ・　スチューデントアパシーには、どんな解決策があるか。私たち大学生にできることは何か。 ・　（可能な範囲で）日頃のカウンセリングの内容や学生への接し方に関すること ・　学生が自身を客観視するために、カウンセラーとして実践されていること
参 加 者	原　信夫先生（新座学生相談所） チームメンバー：２名／ボランティアコーディネーター：１名

「スチューデントアパシー」について、文献等で調べたのだが、少し前のことに関して述べられているものが多かった。そこで、自分たちが疑問に思っていることについて、現在の状況を認識し理解を深めるために、本学現代心理学部心理学科の教授であり、新座キャンパスの学生相談所で専任カウンセラーとして日々学生と接しておられる原先生にお話を伺った。

上記のように、「スチューデントアパシー」についてのヒアリングを実施したうえで、学生にとってどんなことが必要か、また実際に自分たちにどんなことができるかを話し合った。その結果、「リラックスする時間を意識的につくることが大事なのではないか」との意見が上がり、「リラックスすることの大切さの共有」「リラックスできる場所の提供」「ストレスへのポジティブな向き合い方を考える」といった方向でイベントを企画し開催するに至った。

■「ストレスリセット！～ちょっとひと息つこう～」の開催

実施日時	①2023年12月21日（木）12：30-13：20、②2024年１月９日（火）12：30-13：20
場　　所	池袋キャンパス P401教室（ポール・ラッシュ・アスレティックセンター４F）
実施目的	忙しさに追われている人たちにリラックスする時間の大切さやストレスへのポジティブな向き合い方を考える時間を提供すること。
内　　容	(1)　チームの取組みについて（テーマの選定、イベントに至る経緯等）の説明 (2)　ストレッチ (3)　チームメンバーと参加者全員によるシェアタイム
対　　象	本学学生（学部生・院生）、教職員
参加者	①一般学生：２名（申込：５名） 　チームメンバー：５名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：３名 ②一般学生：６名（申込：９名） 　チームメンバー：５名／ボラセンスタッフ（Co.含む）：４名

「今の学生は一生懸命何かをやることで充実感を求めていて、意識的にゆっくりする時間を知らない人が増えている。」という状況から、忙しさに追われている人たちに対してリラックスする時間の大切さやストレスへの向き合い方について知る機会を提供する＝ストレスをリセットするというコンセプトでイベントを開催した。

当日はバレエ経験のあるボランティアセンターのスタッフが講師となり、学生メンバーや参加者とともに、PCやスマートフォンを使う時間が長い大学生に向けて、お尻や太もも、肩などを中心に全身をほぐし、首や親指など、スマホを使うことで酷使する部分のストレッチを中心に行った。

また、身体をほぐした後は、参加者と感想等を共有しあうシェアタイムを設け、「自分と向き合う時間を作りながら自分なりのストレスとの向き合い方を探っていく」というイベントの主旨のとおり、心身を休めリフレッシュする時間の大切さやストレスとの向き合い方を全員で共有する時間となった。

■参加者の声（一部）

・ ふだん学校でゆったりする機会がないので、このような時間があってよかった。
・ 昼間に寝っ転がれるのがいい！
・ 自分の体のどこにストレスがかかっているのかがわかってよかった。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

② 新座チーム

所属：映像身体学科 3年、コミュニティ政策学科 1年、コミュニティ政策学科 1年

同チームは、自分の身近な社会的障壁（バリア）や社会に対して感じる様々な違和感を共有することから活動を始めた。「ルッキズム」「災害被災者への関わり方」「しょうがい者への偏見」など、答えはないけれど解決すべき課題を孕んでいるような社会課題が様々共有され、その一つひとつについて互いの価値観を交差させながら、その背景にあるもの（なぜそのような課題が生まれるのか）を探っていった。特に長い時間をかけて話したのは、「他者と自分が異なることを恐れ、自らの個性を隠して生活している人が多くなっていること」で、その傾向が大学生のコミュニティの中で強くなっていることに対する違和感を確認した。皆が同じような色の服装で過ごしていることもその現れではないかという声もあったが、他人と違うと思われることを極端に嫌がるのは、当たり前のようにある「違い」をネガティブなものとして捉えているからではないか、そう捉えてしまう環境や習慣がバリアになっているのではないかと考えた。

そこで、一つの価値観に縛られることなく、誰もが自分らしく生きていけるように、「違いをポジティブに捉えられる社会の実現」を今回の活動のゴールに設定し、具体的な取り組みを検討していった。

しかし、自分たちにできる具体的な取り組みが思いつかずに多くの時間を費やすことになってしまった。その際、スタート時の思いを振り返ったのだが、チーム内で自分の身近な社会的障壁（バリア）や社会に対して感じる様々な違和感を共有できたことがとても有意義で、なおかつ楽しい時間だったことを改めて実感することになった。身近な人間関係や社会の小さな変化に「もやもや」することがあっても、「伝えた相手にどう思われるのだろう」と不安になることや、うまく「もやもや」を言語

化できず自分の思いを誰かに伝えられないことから、自分の気持ちに蓋をしてしまうこともある。このような課題の解決が設定したゴールの達成につながると確信した。

その「もやもや」が生まれる原因として、社会や個々人がそれぞれの違いを受け止められない雰囲気になっていること、それによって他者との違いをポジティブに捉えられないことが、人と人を分断する「バリア」になっているのではないかと考え、互いの“違い”を受け止め合うような対話の場「ゆるもやおしゃべり！」を企画し、開催するに至った。

■「ゆるもやおしゃべり！」の開催

実施日時	①2023年12月６日（水）13:30-14:15、②12月13日（水）13:30-14:15、 ③12月14日（木）９:30-10:15、④12月20日（水）13:30-14:15、 ⑤12月21日（木）９:40-10:30
場　　所	新座キャンパス ボランティアセンター ミーティングルーム
実施目的	(1) 参加者自身がテーマの背景にある社会課題や個々人の違い、それによる息苦しさを対話の中で解きほぐし、新たな価値観に気付いたり、日頃抱える憤りやモヤモヤした思いをポジティブなものに変換したりすること。 (2) 一人ひとりが違いをポジティブに受け入れられる社会を実現すること。
内　　容	以下のもやもやワードを各回のテーマに設定し、参加者全員で対話を進めていった。 ＜各回のテーマ＞ ①「意識高い系」、②「おじさん構文」、③「お母さんヒス構文」、④「コミュ障」、 ⑤「どこから大人？」
対　　象	本学学生（学部生・院生）
参 加 者	①一般学生：１名／チームメンバー：２名／ボランティアコーディネーター：１名 ②一般学生：１名／チームメンバー：２名／ボランティアコーディネーター：２名 ③チームメンバー：２名／ボランティアコーディネーター：１名 ④一般学生：２名／チームメンバー：２名／ボランティアコーディネーター：１名 ⑤チームメンバー：２名／ボランティアコーディネーター：１名 チームメンバー：２名／ボランティアセンター：スタッフ１名・コーディネーター１名 ※いずれも事前申し込み制ではなく、誰でもふらっと参加できるように実施した。

「ゆるもやおしゃべり！」を５回開催した。この互いの“違い”を受け止め合うような対話の場では、「ゆるい雰囲気」で語り合うことを大切に、「学術的すぎず、私的すぎない、第三の対話の場」にすることを心がけて運営した。各回のテーマに社会の諸問題や言説、ミームにまつわる「もやもやワード」を設定することで、参加者の様々な思いや価値観に触れることができた。

話題がネガティブな方向に進んだり、誰かを責めたりすることがないように、対話のゴールとして“もやもや”をポジティブ化することに取り組み、実際に参加者全員がそのゴールを意識することで、ホスト/ゲストの関係に関係なく、共に創り上げていくような場になった。対話の場をポジティブな空間にすることで、社会全体にもポジティブな雰囲気が広がるよう心がけていた。

このような時間を共有する中で、時には同じような考えの人が自分以外にもいることに気づいたり、様々な価値観に出会ったりすることができ、一人で考えていても出てこなかったであろう考えや新たな気づきを得る瞬間があり、毎回モヤモヤが晴れていくような感覚があった。自分の中にある偏見・バリアにも気付き、時にはそれが解消された感触もあった。

さらに、イベントの内容を社会に発信することで、少しずつ「自分たちの取り組みでバリアに対する意識を変えていける」ことも実感することとなった。

当日の様子をボラセン公式noteで公開中！
右の二次元バーコードを読み取り、
記事をご覧ください。

6）振り返りミーティング（事後学習）の実施

実施日時	2024年２月20日（火）13：00-16：00
場　　所	池袋キャンパス ６号館6301教室
実施目的	１．各チームの取り組みについて、その効果・意義を多角的に振り返ること。 ２．活動を通して得た気づきや経験を踏まえて、解消を目指した「社会的バリア（障壁）」への理解を深めること。 ３．他者の視点を取り入れながら自分の変化を確認することを通して、「社会」の中に自分を位置づける（当事者性を育む）こと。
ゲスト	・ 青木　悠弥さん （コミュニティ福祉学研究科 博士前期課程２年／2019年度 バリアフリー映画上映会 学生実行委員長）
参加者	学生実行委員会：６名／ボランティアセンタースタッフ（Co.含む）：４名 ※欠席学生の内２名については、後日フォローアップを実施した。

■各チームの取り組みの共有

池袋・新座の各チームがお互いの取り組みについて、どのような目的・経緯で、どのようなことに取り組んだのかをスライドを用いながら発表し合った。中間報告会以降、各チームの詳細な活動については共有していなかったため、実際にどのような取り組みが実現したのかについて、関心をもって聞く様子が見られた。

■「ココロ（キモチ）」の振り返り

振り返りのはじめに、「ココロ（キモチ）」に向き合う時間を設け、その後、“最も感情が動いた場面”を共有しながら、それぞれの感情の揺らぎや気持ちの変化を振り返った。

まずは個人で振り返り、“最も感情が動いた場面”をワークシートに書き出した後、所属チーム関係なくごちゃまぜにしたグループでその場面を共有した。グループ内で聞き手となるメンバーが気になる点を質問しながら、話し手のキモチを深掘りしていったのだが、自分とは異なるチームの取り組みでも、活動を通して感じていたポジティブな感情やネガティブな感情に共通点があることを知り、共感し合う様子が印象的だった。

各グループで話された内容を全体で共有した際には、課題解決に向けた取り組みの進め方に苦慮したり、企画実施までの道のりが長く、結果的に実施段階では時間がタイトになってしまったりしたことが共通の課題として挙げられた。前年度の学生も振り返り時に同様の課題を話しており、キックオフミーティングの際にも前年度の参加学生から共有されていたわけだが、実際に活動を始めてみると、想像以上にメンバーの予定を合わせ、何度も軌道修正をしながら進めていくことが大変であるということを感じたようだった。

ただそのような時にこそ、「同じ問題意識をもって集まったメンバーと議論を重ねながらプロジェクトを進められること自体が励みになった」という話や、「自分一人であれば失敗から立ち直れないかもしれないが、このプロジェクトではみんなで協力して進められたことで、失敗を経ながらもその都度立て直して取り組むことができたことがよかった」という話も共有された。困難を感じたり、悩んだりしたことで、より深いコミュニケーションや協働関係を求められ、結果的にその関係性を通して取り組みの実現に至ったことに達成感を感じていたようだった。

また、自分たちの考えたテーマの実現があまりにも大きく、「自分たちにできることは何なのか？」と、スキル面から不安になることもあったようだ。しかし、具体的な企画が立ち上がり、その実施にまでこぎつけたことで、学生は参加者からの反応をもらうことの喜びを感じていた。さらに、学生（自分たち）だけでは様々な難しさを感じていた部分が、ボラセンスタッフをはじめ、学内のつながりなどを頼りに様々な方々の協力を得て実現できたことで、結果的にポジティブな感情へと変化していったことも共有された。「自分で手を挙げて飛び込んだ活動の中で、他者に刺激を受けて今までの自分とは大きく変わった」という声もあり、自身のチャレンジと成長に喜びを感じていたようだった。

■「アタマの振り返り」

続いて実施した「アタマの振り返り」では、所属チームごとに、自分たちが取り組んだ活動の効果・意義を多角的に振り返った。まずは、解消を目指してきた「社会的バリア（障壁）」をチームごとに確認し、そのうえで自分たちの取り組みによって生み出したと考えられる「効果・意義」を付箋にできるだけたくさん書き出した。その後、個人で書き出した効果・意義のアイデアをチームで共有し、それらを模造紙に書き込んだ４つの枠、「①ボランティア自身」「②課題の当事者・活動の対象」「③活動する組織」「④地域・社会」に分類・配置していった。

作業を進めていく中で、完全な分類は難しく、領域をまたいだ付箋も数多く見られたが、その中でも「①ボランティア自身」に関する効果・意義が多く共有されていた。自分たちにとっての良い影響が様々な場面で生まれたことに気付き、「誰かのために取り組んだことが、結果的に自分のためにもなっていた」ということを改めて認識した。

「アタマの振り返り」の最後に行った各チームの発表の内容を簡単に紹介する。

▼池袋チームの発表

今の学生は一生懸命になり過ぎる傾向があると知り、忙しさに追われる学生に対してリラックスする時間の大切さやストレスへの向き合い方について知ってほしいと考え、ストレッチイベントを行った。

当日は和やかな雰囲気の中、全員でストレッチ行い、心身を休めリフレッシュする時間の大切さやストレスとの向き合い方を伝えることができた。しかしながら、改めて振り返ると、事前の広報で、ポスターのテイストなど、もっと様々な人たちに自分ごととして関心をもってもらうような内容にもできたのでは？とも思った。参加者とのコミュニケーションについても反省点が残った。

今後このようなイベントを行う際には、参加者へのアプローチ方法やリラックスした雰囲気を作っていけるよう、今回の学びを活かしていきたいと思う。

▼新座チームの発表

身近な人間関係や社会の小さな変化への「もやもや」に対して、互いの“違い”を受け止め合えるような対話の場「ゆるもやおしゃべり！」を開催した。毎回、自分事として楽しく真剣にテーマを深掘ることができたり、仲間の率直な意見に触れ、自分とは異なる視点をもてたりしたことが面白かった。

広報面や、運営・場づくり（和やかでゆるい雰囲気にもっていく難しさ）には何度も悩んだが、その場に集まった人たちが、これまで一人で抱えていたことを共有できたことから、目指していた雰囲気はうまくつくれていたのではないかと思う。

“もやもや”をポジティブ化し、参加者全員がそのゴールを意識することで、ホスト/ゲストの関係に関係なく、共に創り上げていくような場になったと思う。対話の場をポジティブな空間にすることで、社会全体にもポジティブな雰囲気が広がっていけばよいと思う。

■「“私”とバリアフリーな社会」について

最後に、「あなたはバリアフリーな社会の中に、自分をどのように位置づけますか？」という問いに対して、それぞれが自分の言葉で語る時間を設けた。一人ひとりが自分の考えを整理し、まとめる

時間を設けたうえで、「バリアフリーな社会とは何か？」「それを実現させるため、自分にはどんな関わりができるのか？」「なぜそう考えたのか？」などを全員の前で話していった。
　学生がワークシートに書き込んだ内容の一部をいくつか紹介する。

- 私自身、このプロジェクトに参加してバリアフリーのイメージがかなり変わった。世の中には自分の知らないバリアが多くあったのに気づけたのがとても嬉しかった。また、このプロジェクトに参加するまで（参加してすぐの頃まで）は、自分自身がそのバリアを抱える当事者ではないことを前提にそのバリアの解決策を考える時に、理解というより想像で考えてしまうことに対して、自分の中で抵抗であったり難しさであったりを感じた時もあった。しかし、活動を通して、今まで気づいていなかっただけで、実は自分自身がバリアを抱える当事者であったことを実感させられた。この経験によって、「バリアフリーな社会」とは「全ての人が生きやすい、生活しやすい社会」というのは勿論、「自身を客観視して見つめ直し、自分自身を大切にする機会を与える社会」なのではないかと感じた。そして、私自身、今回の経験をきっかけに周りの人にもちょっとした話題をきっかけにバリアについて広めていけたらと感じた。

（池袋チームのメンバー）

- 今まで「バリアフリーな社会」と聞くと、物理的なバリアのない社会を想像していたけれど、普段私の抱えているモヤモヤを“心理的なバリア”と捉えて、自分自身が社会に対して働きかけていいのだなという気付きがあった。その結果、今まで個人で生きていた感じがあったけれど、社会の一員として生きているような感覚が得られたし、楽になった。私は「バリアフリーな社会」を実現させるために、さらに対話をしていきたいなと思う。私が対話をするのが好きなのもあるけれど、知らないから認め合えなかったり、話さないから憶測で判断して、それを正解だと思い込んで話を進めたりすることを普通のコミュニケーション・人間関係とは思わないので、“話し合える”という空気を作っていきたいなと思った。

（新座チームのメンバー）